

早稲田商学第 399 号
2004 年 3 月

書 評

Yoshiaki SHINODA, *Instructing Japanese Learners of English Technical and Scientific Writing: The Rhetorical Approach* (KENKYUSHA, 2003)

本 橋 朋 子

著者の篠田義明教授は、2002年6月、早稲田大学大学院教育学研究科より、博士（教育学）の学位を取得なさった。本書は、篠田教授が40年以上にわたるテクニカル・ライティング研究の集大成ともいえるべき博士号学位論文を加筆・再編成したものである。博士号取得の翌年という、驚くべき早さで学位論文が、英文書の出版では最高位の研究社から出版されるのは非常にまれであり、これは、内容が高く評価されている証に他ならない。

本書は、科学技術文書作成に携わる全ての人たち—教員、学生、エンジニア、技術翻訳者、科学者などを対象とし、日本での英語によるテクニカル・ライティングの研究—Technical and Scientific Writing (TSW) において、日本人学習者に指導すべき内容を提案している。また、日本で TSW を発展させていくために、日本人の指導者を育成する必要性についても論証している。

今や技術大国となった日本では、研究の成果、アイデア、製品などを英語で発表することが必要不可欠となっているが、明確で効果的な文書を作成する指導が十分にされていないのが現状である。アメリカでは、200以上の大学が TSW の分野で学士、修士、博士課程を設置しているのに対し、日本の大学ではこうしたプログラムは皆無である。日本の大学に設置されている科学技術英語などの授業では、文法、専門用語、読解練習などを扱うにとどまり、コミュニケーションに必要な現代修辞法 (modern rhetoric) を指導しているところはほとんどない。そのため、文法上は正しい英文でも論理性のある

文書を作成することができないという問題が生じている。そこで、著者は、40年以上にわたる大手企業での社員教育や大学での英語教育を通して、また、25年以上にわたるミシガン大学での研究を通して、日本人英語学習者の抱える問題点を分析し、TSW の理論と方法を確立した。

本書は、5つの章、補遺、参考文献から構成されている。

第1章では、日本における英語による TSW 研究の範囲をアメリカと日本の現状を比較し、論及している。また、著者が定めた Technical and Scientific Writing (TSW) という名称について言及し、目的を持った英語—English for Specific Purposes (ESP) と TSW との関連性を説明している。さらに、著者が TSW の指導で関わった英文書類や、著者が考案した TEP Test (早稲田大学・ミシガン大学テクニカルライティング検定試験—The Technical English Proficiency Test of the Joint Program in Technical Communication of The University of Michigan and Waseda University) の答案を分析した結果、日本人学習者の弱点を見出し、TSW には、現代修辭法の指導が重要であると述べている。

第2章では、まず、TSW をその起源から現在まで概観している。TSW の起源が、原始時代の壁画や楔形文字などに見られることや、ヨーロッパでは、ルネサンスの時代に TSW が本格的に出現したこと、産業革命により TSW の必要性が急速に高まったことなどを説明している。その後、第二次世界大戦後の科学技術の発達に伴い、TSW の研究がアメリカでも盛んになっていったが、日本では、1980年代に初めて、TSW の研究機関が設立されたという経緯を説明し、この分野で日本が立ち遅れていることを指摘している。

次に、欧米における TSW の様々な定義を分析した結果、欧米では、TSW の指導領域を、主題 (subject matter)、言語学的アプローチ (linguistic approach)、思考過程のアプローチ (thought-process) に分類していることを見出している。著者は、これに文化的な相違を考慮して、日本人学習者にふさわしい指導内容や指導領域を提起している。すなわち、見出し (heading)、目的 (purpose)、要約 (summary)、対象 (audience)、データの選択 (selection of data)、パラグラフの構成 (organization of paragraphs)、パラグラフ展開のパターン (paragraph patterns)、明確なセンテンス (clear sentences)、用語の選択 (choice of words)、視覚資料 (visuals)、形式 (for-

matting) である。

第3章では、企業や大学の教育現場での著者の長年にわたる経験から培われた研究成果ともいえるべき TSW の手法を詳しく紹介している。まず、一般教養の英語と目的を持った英語、つまり実用英語の相違を図で表し、実用英語を実務の領域と学術の領域に分けている。そこで、文法、構文、文学などを中心とした一般教養の英語に対し、実用英語では、用語、現代修辭法、文法、形式、という4つの指導領域に注意を払うべきだと述べている。

次に、4つの領域それぞれについて、TSW において日本人が抱えている問題点に対する指導項目を具体的に挙げている。

用語の選択については、One Word/One Meaning (一語一義) という表現を作り出し、実用文書では、具体的な単語を用いる重要性を述べている。そのために、名詞や動詞の選択、名詞の形容詞的用法、代示、語と語の相性 (コロケーション) に関する注意点を説明している。

現代修辭法については、センテンスとパラグラフレベルで、簡潔で明確な表現にまとめる技法を豊富な例文を用いて述べている。つまり、目的別文書のスタイル処理法、基本動詞や句動詞の処理法、適切な語調、定義法、複文を単文にまとめる方法、効果的なセンテンス構成法、効果的なパラグラフ構成、および展開法などである。ここでも、One Sentence/One Idea, One Paragraph/One Topic といった著者が作り出した表現を用いて、分かりやすく説明している。特に、パラグラフの展開については、説得のパターンと情報伝達のパターンに大別し、さらに、それぞれを5つのパターンに分けて説明している。すなわち、説得のパターン (説得、問題・解決、原因・結果、比較、対照) と、情報伝達のパターン (分析、記述、プロセス、調査・研究、定義) である。

文法については、日本人の苦手な項目として、助動詞、時制、仮定法、前置詞、冠詞を挙げている。

形式については、いかなる書類にも最小限守るべき形式があるので、それぞれの組織や企業などが定めている形式に従うべきだと述べている。

第4章では、実際に日本人によって作成された英文書類を実務の領域 (日本で書かれてアメリカへ送られた英文書類) と学術の領域 (英語で書かれた論文) に分けて、前章で説明した手法に基づき検討し、講評している。それぞれの実例について、[Original]

と [My Revision] を載せ、詳細な講評が加えられているため、非常に参考になる。

第5章では、これまでの議論をまとめ、日本人学習者にとって効果的な指導法を構築するために、以下の10項目を提言している。

1. 大学は、TSW で学士、修士、博士号を授与する学部を設置する。
2. 英語による TSW を指導する者は、上記のプログラムで教育を受ける。
3. TSW では、コミュニケーション能力を向上させるために、適切な言語学的側面と現代修辞法を指導する。
4. 指導者は、現代修辞法の効果的な利用法を指導する。
5. 指導者は、適切な用語選択、効果的な文の構成、適切なパラグラフの構成法を指導する。指導者が、内容を理解できない場合は、その分野を専攻している学生に確認する。
6. 科学技術の専門分野については、英語の教員ではなく、各分野の専門家が指導する。
7. 科学技術の分野を専攻している学生やエンジニアは、TEP テスト、つまり、科学技術分野におけるコミュニケーション能力を測定するテストを受験する。
8. 効果的な TSW の基本を習得するために、学習者に、明確に、簡潔に、正確に英文を書くように注意する。
9. 学生は、論文を作成する際、各機関が定めているスタイル・マニュアルに準拠する。
10. 学生は、文書作成上の基本要素、つまり、見出し、目的を表す文、アブストラクト、要約、視覚資料、形式などに準拠する。

本書には、補遺が11項目ある。ここでは、テクニカル・コミュニケーションプログラムが設置されている教育機関のリスト、著者が携わった社員研修の企業リスト、テクニカル・コミュニケーション関連の学術団体や協会のリスト、1980年に設立された Japan Society for Technical Communication の役員リストが挙げられている。また、TSW の重要性についての米国航空宇宙局 (NASA) による見解、日本人の作成した英文書類に対するアメリカ人の専門家達による見解を紹介している。アメリカ人の作成した非論理的な日本語文書に対する著者による批評も載せている。他に、Abstract と Summary の違いや、Title や Subject Line の作成法、ミシガン大学における TSW の授業のシラバ

スも紹介している。

本書は、日本における TSW 研究を体系づけた唯一の書である。TSW のスキルを身につけようとしている人たちにとって、理論と実践の両方が学べる本書は、まさに必携である。また、本書全体の構成を通して、英文で書かれた学術書であることから、これから英語で論文を書こうとしている学部生、大学院生、Ph. D. を取得しようとする研究者、仕事で論文を書く必要のある人などにとって、論文の中身の書き方のみならず、目次の立て方などの形式を知る上でも、大いに役立つ稀覯の書である。